

OUMC

大阪大学山岳会 会報

No.19

2017年7月

発行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

部員は増えたが…

「山岳部をどう」建設する

常務理事 山田 靖則

これまで年2回程度、山岳部長の森藤正人君を交えて現役山岳部との情報交換会を持ち、山岳部の現状と今後のあり方について意見交換を行ってきたので、その内容について報告したい。



山岳部の部員数は、吹田キャンパスの体育館に設置したクライミングウォールの効果もあり、大学院生を含めて30名を超えている。部活動の形態は山岳部のホームページに

あるようにクライミングが主体で、いわゆる「山岳部」としての登山活動は我々が期待する内容とはなっていないのが実情である。

◇クライミング活動について 現在の山岳部の主要な活動にクライミングがあり、一昨年の学生クライミング選手権では、当時の岩本亮太主将の個人的力量もあり、団体3位と

いう成績を収めた。しかし、昨年9月の同選手権には態勢ができておらず、出場していない。これまでは岩本君の努力で引っ張ってきたが、他の部員が、出場できる技術レベルに達しておらず、訓練に部員がついていけないという状況があるようだ。

今年度のクライミング大会も、リーダーグループの部員のモチベーションを向上させる努力と、各部員の技術の向上がないと出場できない可能性がある。情報交換会では最下位でもいいから出場したらどうかと持ちかけたが、はかばかしい回答は得られていない。

◇登山活動について 山岳部本来の活動である山行は月1回程度行っているが、医学部山岳部との合同であり、相手の計画に乗っている状態である。昨夏は益明けに穂高山行を行っているが、同様に医学部山岳部との合同で、小屋泊りであった。

山行を希望する部員もいるが、どのような山行をしたいのかについて

はあいまいであり(例えば夏の雪渓を歩く、北アルプス等の縦走をする、八ツ峰のような岩稜を歩く、簡易でも雪山に行くなど)、これからの動機付けが、特にリーダーグループに對して必要と思われる。

以前と異なり、大学の教育は7月に前期課程が終了し、試験が実施されるので、休みは8月からであり、課目によっては試験が8月にずれこむこともあるようで、夏山合宿のような活動を行いにくいのも実情である。10月からは後期課程が始まるため、10月山行といった計画も立てにくくなっており、9月山行として行うことになるであろう。

いずれにせよ、早く計画を作成すれば、山岳会員による同行が可能なので、そのように動くように要請しているが、並行してザイルワーク、懸垂下降といった技術も教える必要がある。場所を探せば学内でも石垣等で可能と思われるので実施できるよう調整が必要であろう。

◇今年度の活動について 新しく谷井脩一郎主将の下で活動計画が立てられるであろうが、クライミング活動、登山活動とも前向きな方向が打ち出されるのを期待している。

日常活動については、これまで要望してきた部会は月1回程度は開かれているようだが、日常的にランニン

連携を強めて登山に参加しやすい環境をつくること、また、体育会山岳部独自でも山行を企画できるようにすることを考えています。

最近ではスポーツクライミングの人氣が高まり、部員の数も徐々に増えてまいりました。現在の部員数は28人となり、さらに多くの新入生が入部する予定です。現段階では10人ほどが入部を決めてくれています。

部員が増えたことは活動を活発化させる大きな好機であり、また、活動自体の幅を広げることに繋がると感じております。そのためにも部員同士の連帯感を強め、高め合えるような環境をつくるのが主将の役目として何より大切だと思っています。



新人歓迎会に集まった部員たち

す。役割をしつかり果たせるように邁進して参ります。よろしくお願ひ

致します。

(人間科学部3回生)

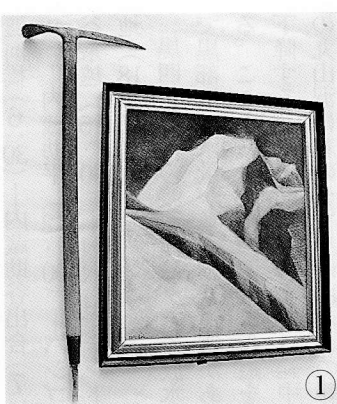
住吉さんの遺品、対岳館へ寄贈

「与兵衛俱樂部」で展示へ

会長 大野 義照

一昨年亡くなった住吉仙也氏の遺

品の登山装備などが9月3日に開かれた白馬集会の際、対岳館に寄贈さ



①

れました。対岳館では与兵衛倶楽部の展示スペースに専用コーナーを設けるそうです。

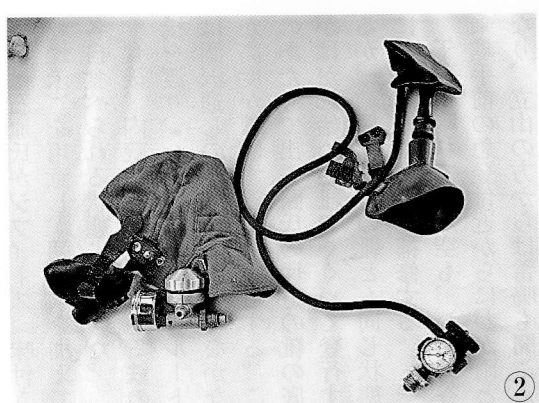
寄贈は遺族の依頼を受けたもので、まずはピッケルとP29を描いた油絵Ⅱ写真1。ピッケルは住吉さんが1970年前後に使っていたと思われるスイスのウイリツシュ製。絵は故三枝礼子さんがベースキャンプ近くから見たP29東面を描いて贈ったもので、住吉さん宅の玄関に長く

掲げられていました。

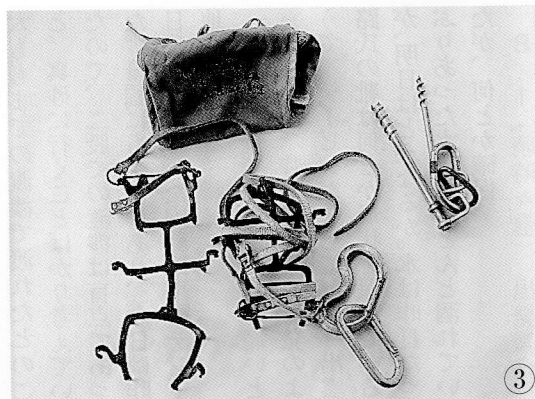
酸素マスクとレギュレーターⅡ写真2

は日本人が初めて登頂した1970年エベレスト隊に参加した際に使用されました。アイゼンは

1965年のJACヒマルチュリ隊で、スクリューピトンはP29隊より後のヒマラヤ登山隊で使ったものと思われますⅡ写真3。



②



③

住吉さんの隠れた遺品も

英文のP29登頂報告

この記事に関連して知ってほしいのはP29初登頂成功後、住吉さんがヒマラヤ専門誌の「The Himalayan Journal」に登頂記録を投稿していたことです。これは同期の大川和秋氏(工64)に教わったもので、1970年版の30号に10ページ余りにわたって1次隊から4次隊まで10年間の取り組みが報告されています。写真も多く使われ、登頂の証拠とされた故・渡部洋隊員らの下降シーンも掲載されています。この報告は一部の関係者しか知らなかった

ようで、私も初めて知りました。

著作権の問題もあり、ここでは公開することはできませんが、ご興味のある方はパソコンの検索システムで「Himalayan Journal 30」と入力、出てきた一覧の10番目を選んでください。日本語への翻訳ソフトもついています。(高田邦雄記)

劔沢渡れず引き返す

劔岳山行敗退記

山田 靖則

【期間】7/29～8/1

【メンバー】出雲路敬孝、山田靖則、石原敏雄

3年前、長次郎谷から劔本峰に登って以来、いろいろと山域を検討してきたが、やはり雪の上を歩きたいと、最近、氷河と認定された三ノ窓雪溪から北方稜線経由で本峰に至る計画を立案した。黒四ダムから内蔵助平を経由して真砂沢出合にBCを設け、二股経由で三ノ窓に至るルートである。東京支部の石原氏に持ちかけたところOK。さらに出雲路さんも参加ということになった。

【行動記録】

7/29(曇) 信濃大町駅―扇沢―黒四ダム―ロッジ横の野営場

東京から車で来る出雲路、石原両

氏と信濃大町駅で合流し、石原氏の車で扇沢へ。そしてトローリーバスで黒四ダムへ。ダム左岸の道を30分で野営場へ。野営場の使用料は一人700円。ロッジ横には水洗トイレ(有料)もある。晩飯は初日くらい豪華にという石原氏の提案で牛肉とねぎのすきやき。高い肉のようで豪勢。

7/30(晴後曇一時雨) 出発(5:20)―黒四ダム(5:55)―黒部側渡河橋(6:30)―内蔵助谷出合(7:40)―内蔵助平(12:00)―ハシゴ谷乗越(15:30)―劔沢右岸テント地(18:15)

黒四ダム下の渡河橋はダムの放水で黒部川の水量が多く、緊張感がある。ここからは左岸の旧日電歩道で下降する。内蔵助谷出合までは途中の丸山沢に春のデブリがあるとの報告があったので、アイゼンをすぐ出せるようにしていたが、結局、デブリのデモなかった。1時間少しで内蔵助谷出合へ。

出合からの道は丸山東壁の下を捲くように登る急な道で、はじめは巨石のガレ、内蔵助平に近づくにつれて山腹からの湧水で湿地状になる。途中で山田が体調不良を訴え(軽度の熱中症?)、30分ほどの休憩で頭や体を冷やし、回復を待って出発。平の中に水場があったので昼食に。

昼食は石原氏がジフィーズ(味付き乾燥米)を用意し、朝、水を加えて各自食べられる状態にしていた。

食後、内蔵助谷本流に架かる鉄の橋を渡り、ハシゴ谷乗越へ。ルートは涸沢通しの登りであるが、なかなか高度が稼げず、いらいらする。このあたりで出雲路氏の片方の靴の底がはがれ始め、紐でくくって登行するが、結局、両方の靴とも同じ状態になり、紐や針金で補修する。

午前中晴れていた空も、ハシゴ谷乗越手前の急登付近からにわか雨となり、立山の方からは雷鳴も聞こえた。ハシゴ谷乗越は50年前の記憶しがなく、昔とは位置が違うような気がした。乗越からは昔はハシゴ谷を二股の方を下っていたはずだが、今は八つ峰I峰の三稜下端に向って劔沢に下る尾根についている。この下りは途中から崖のように急な半腐れの木製はしごの下降となり、横木が折れはしないかと緊張する。劔沢への降り口は不安定な急な土砂の上。最後にFIXがあるが、これは編みザイルの袋が岩との摩擦で破れており、かなり危険なものだった。

劔沢に沿って真砂沢出合の方に渡河地点を探しながら行くが、三ノ沢からのデブリは劔沢流水部までしか届いておらず、劔沢の水量も多い。内蔵助谷途中で我々を追い抜いて

行った単独行の人も、渡河地点を見つけられず仮泊するという。結局、我々も渡河できず、劔沢右岸の三ノ沢出合の少し上流に幕営する。すぐ目の前に二股への道が見えており、非常に残念。明朝、再度水量を確認することにした。

7/31(曇時々晴、一時小雨) 出発(7:00)―ハシゴ谷乗越(9:55)―10:10―内蔵助平(13:30)

朝、もう一度、上流側を見に行くが、良好な渡河点はなく、劔行は断念。昨日までハシゴ谷乗越までのルートは二度と嫌だと皆言っていたが、このルートでしか帰れない。乗越からの下りで数パーティーに追い抜かれたので、劔沢をどうやって渡ったか聞いてみると、二股地区で太ももまでの渡渉で渡れたとのこと。真砂に行くことばかり考えていたので、二股での渡渉は盲点であった。日程にも余裕があり、今日は昨日目をつけていた内蔵助平のテント地までとする。

涸沢の下りで石原氏が足が痛いと言いだした。昔の肉離れの再発のようで、テーピングをして下る。出雲路氏の靴は何か形状を保っているが、明日はどうなるか。水は昨日たっぷりあった水場がほとんど涸れていて、何とか確保。

8/1(晴時々曇) 出発(6:..

10) —内蔵助谷出合(9:30) —黒四ダム(12:00)

内蔵助谷の下りは登ってきた時に感じた以上に急峻で、全員ガタガタになって出合着。渡河橋では放水の霧を受け、ダムへの登りは一番嫌な個所であるが、息を切らして登る。

出雲路氏の靴もなんとか耐えられた。トロリーバスで扇沢へ出、ここで昼食。その後、大町温泉郷で汗を流し、信濃大町駅で東京組と別れた。

この日の長野市周辺は集中豪雨で、松本駅に着いたら、予定していた名古屋行き特急が運休。1時間半後の次の特急はなんとか運転されたが、松本駅で70分遅れ、名古屋駅での新幹線乗り継ぎも最終の1本前で、それでも何とか新大阪駅で地下鉄の終電に間に合った。最後まで運のない山行であった。

高知県・仁淀川源流域へ

昨夏の「自転車ひとり旅」

糸井 文彦

3回目となった昨年夏の「自転車ひとり旅」は高知県・仁淀川源流域を訪ねることをメインテーマに4日間、370[□]のツーリングを行いました。この旅の目玉は仁淀川源流域の限界集落へ日本郵便在職時代の知

人を訪ねたことです。実に魅力的な独り暮らしで、農業と釣り(鮎とアメゴ)の自由な山奥生活でした。息も絶え絶えに自転車で走る道すがら、様々な人との出会いもあつて思い出に残る旅になりました。

「行動記録」

8/22 台風9号による強い風雨の中を8時に横浜市の自宅を出発。新幹線と高速バス(大阪→鳴門)を乗り継いで16時に鳴門市に到着し、ビジネスホテルに投宿。自転車は宅配便で事前に送っておいだ。

8/23 5時46分出発。長途を考えると一路徳島への気持ちもあつたが、まずは四国霊場第一番札所、霊山寺(りょうぜんじ)へ。同寺で長旅の無事を祈つた後、徳島市へ向かう。この日の目標は140[□]先の室戸岬。ひたすらペダルを漕ぐ。徳島駅を経て阿南市の先からは山道にかかつて起伏のある地形に苦しみながら11時半に日和佐に到着。その後、牟岐、穴喰を通り、室戸岬にはいまだ程遠い東洋町甲浦で行動終了し、ビジネスホテルに投宿。

◇走行時間約9・5時間(含む食事等休憩時間以下同じ)、走行距離約130[□]。

8/24 この日の目的地は120[□]先の高知市。5時40分にホテル出発。朝食も食べずに出て、強い太陽

が照りつける道をひたすら走り続け8時に室戸岬到着。やつとの思いだったが、コンビニも観光施設もない、有名な割に全く愛想のないところだった。こんなところに長居は無用と、高知へ向けて出発。それにしても高知県は驚くほどのコンビニ不毛県だ。夏の長いツーリングにおいてコンビニは冷水補給とトイレ利用の両面で砂漠のオアシスのような場所なのに？

苦しい思いをしながらも安芸駅に正午到着。駅前食堂でようやく昼食をとることが出来た。安芸市から先は海を離れた台地上の道。ひたすら先を急いで16時少し前に高知駅に到着し、ビジネスホテルに投宿。高知市では富士銀行時代にお世話になった元日本IBMのT・T氏に35年ぶりに再会出来たのが大きな喜びであった。

◇走行時間10・25時間、走行距離約120[□]。

8/25 いよいよ今回のメインテーマ、限界集落を訪ねる日。その限界集落で独り暮らしをするS・I氏は日本郵便時代に大変お世話になった方(元同社役員)。目的地までは50[□]程度なので、少し遅い8時半に出発した。この日は度々、強い雨にわか雨に襲われ、道端の軒先で雨宿りを繰り返すこととなった。伊野

市を過ぎると、いよいよ仁淀川の渓谷に入る。ガラガラとした長い道を登り、奥深い渓谷の中の目当ての集落の下と思しき地点でS・I氏に連絡。ほとんど崖状態の急坂を同氏の手助けを得て自転車を持ち上げて約20分上がり、めでたく到着となった。同氏宅では鯉・鮎・アメゴ等々数々の珍味を堪能させて頂いた。

◇走行時間約4・5時間、走行距離約50[□]。

8/26 今回のコース最難関の石鎚山系を越える日。S・I氏宅を6時半前に出発。大渡ダム堰堤までの1時間弱の輪行の後、送って頂いたS・I氏と別れて一路仁淀川上流へ向かう。途中、高知・愛媛県境を越え、道は三坂峠(720[□])までの久万高原をひたすら上っていく。約3・5時間の上りを経て三坂峠を過ぎ、眼下に広大な松山平野を眺めた時の感激は実に大きかった。その後はひたすらの下り道と、松山平野の平坦な道を2時間弱走って遂に松山駅到着。道後温泉で汗を流して今回の旅のフィナーレとした。

夜は日本郵便時代にお世話になったS・F氏(元日本郵便四国支社長)宅を訪ね、楽しい歓談のひとつきを過ごさせて頂いた後、泊めて頂いた。◇走行時間約6・5時間、走行距離約70[□]。

〔雑感〕 四国は大きな島であると実感した。そして新幹線がないのは良いことだ。これにより様々な環境・景観破壊から免れている。我が国で年々失われていく古き良き鉄道沿線風景と駅舎周りの風情が残されているメリットは大きい。

夏の「自転車ひとり旅」も3回目となったが、その間の装備・用具などに関する経験ノウハウ蓄積によって道中の問題発生もなく、非常に円滑に実行することが出来た。出発前に最も恐れていたパンクが起きなかったのは幸運だった。

アプサラサス初登頂40周年 大阪で記念集会

1976年に阪大山岳会が初登頂したカラコルム・アプサラサス峰(7245m)の初登頂40周年記念集会が8月7日、阪大中之島セントー交流サロンで開催されました。

参加者は遠征隊から三澤日出夫元隊長、石原敏雄元副隊長、稲垣佳夫、篠田勝久、吉田真三の元隊員及び三木哲郎医師。そのほか会員から山田靖則、墨石芳夫、大宅幸夫、高橋正身、奥山宏臣の各氏、元山岳部員から竹田清・元国立大阪病院院長、数年前に亡くなった栗原完治元隊員の弟、栗原稔氏が参加しました。

会は昼食会の形式で行なわれ、石原氏の編集した記録フィルムの上映や、三澤さんの挨拶、乾杯のあと、元隊員や参加者の現況報告があり、40年ぶりの再会を喜び合うかたわら、元山岳部員の竹田氏や故栗原氏の現役時代の思い出など話題のつきない会合でした。

終了後は会場を梅田第三ビルのビアホールに移し、夕方まで盛況が続きました。

今年も現役6人が参加 2017年新年会

2017年新年会は2月25日午後、阪大中之島セントー交流サロンで開催されました。

参加者は会員からは10人と寂しいものでしたが、大阪外大山岳会から上島泰嗣氏、現役山岳部からは新年度主将に予定されている谷井脩一郎君ら6人が出席しました。

席上、山岳部からは2016年度の活動の簡単な報告と新年度の活動方針の説明があり、そのあと参加部員一人ひとりの自己紹介がありました。特に山行については山岳会員との間で積極的な意見のやりとりがありました。

他の出席者は次のみなさん。

(会長以外は卒業年次順)

大野義照会長、山本光二、岡田博司、広瀬貞雄、高田邦雄、山田靖則、黒岩芳夫、森藤正人、大倉徹夫

「山岳部」大上毅彦、染井駿太、北林史弥、丸岡漢、三吉健太

90歳の大島氏も参加

2016年白馬集会

恒例の白馬集会在9月3日、長野県白馬村八方のホテル対岳館でおこなわれました。直前になって不参加者が続出し、出席者は大野義照会長、90歳になられた大島輝夫さん、久々の参加という佐野威和雄さん(理78)ら10人でした。

食事は大島先輩の卒寿を祝ってシャンパンの乾杯が始まり、宴もたけなわのころ、大島さんから「時報」には載っていないエピソードの紹介など、参加者が初めて聞くような話も飛び出しました。

食事会のあとは、いつもように「兵衛倶楽部」で二次会。夏山山行で劔岳に取り付けなかった山田靖則氏らの劔山行の報告などが紹介されました。

5日の恒例のゴルフは丸山庄司さんを含めて3人だけのさびしいものでした。

参加者は次のみなさん。

大野会長、大島輝夫、兼清喜雄、

前澤祐一、高田邦雄、田中喜樹、山田靖則、石原敏雄、稲垣佳夫、佐野威和雄

東京支部だより

春の懇親会に14人

東京支部恒例の春の懇親会が4月1日正午から東京大学駒場構内のレストラン「ルヴェゾンヴェール駒場」で開催されました。50代の若手から80代までの幅広い年齢構成の14人が出席し、懇親会では初めてのフレンチコースを楽しみました。

個室ということもあってワインを次々と空け、和気あいあいとした雰囲気の中で会話が大きいに盛り上がりました。出席者全員から近況報告があり、リハビリ中の方もいるもの、多くの会員が登山、スキー、ゴルフなどを常時楽しんでいる様子がかげえました。また、野田さんから8月11日の「山の日」にちなんで日本山岳ガイド協会などが発行した「安全登山ハンドブック」の説明があり、最近の栃木県での雪崩事故についても話し合われました。

出席者は次のみなさん。

(卒業年次順)

兼清喜雄、野田憲一郎、米林外茂男、村井忠雄、酒井次郎、前澤祐一、

会員の近況

米澤成二、泉田浩二、石原敏雄、高橋正身、井上太一、上松一雄、村田正弘、今村義弘 (井上記)

総会や白馬集会の出欠はがきなどから抜粋。その後の変動などは未確認。卒業年次順。西暦。敬称略

鷺沢 忍 (工56) 数年前から間質性肺炎で肺機能が低下し、登山はおろか、ハイクもできなくなりました。最近ではレンタカーでの観光に転換し、英国の史跡とガーデン巡りを重ねました。これとて84歳になるとやめねばなりません。

播本 裕晃 (法65) 山登りはいよいよできなくなりました。北アルプスは3年前の早月尾根から劔岳が最後。近郊ハイクもやめました。

出雲路 敬孝 (工67) 昨年は身内の雑事が重なり、あまり山に行けませんでした。3月に石原さんと富士山の裾、7月末に石原さん、大阪の山田さんと劔ねらいの内蔵助平から劔沢まで、それと元勤め先のOB連中とおこなっていた中仙道街道歩きについてに黒斑山に登ったくらいです。今年はまだ少し増やしたいと思っています。街道歩きも日光街道を歩き始めました。

黒田 治朗 (医69) 膝の痛みを回復させるため、ゴルフ場では歩いてリハビリをしています。何とかもう一度、ヒマラヤを見にトレッキングをしたいと思っています。

岡田 謙治 (法65) 冬はスキー、3〜12月はヨットに励み、その合間に細々と仕事を続けております。

篠本 勝 (工72) 2016年の登山記録。3/20〜4/2 飯豊山。悪天候で引き返し、避難小屋で5泊を強いられる。5/5〜9 南アルプス白根三山。強風と雨で農鳥岳山頂でビバーク。7/8〜8/13 針ノ木岳&黒部川。釣りを兼ねる。9/9〜27 越後平ヶ岳。10/1〜11 会津駒ヶ岳。釣りを兼ねる。12/10〜13 飯豊山。12/24〜27 人のいない尾瀬。12/23〜28 上高地、横尾、蝶ヶ岳

大宅 幸夫 (歯76) 沢登り、山スキー、ゴルフ、ビリヤードなど仕事をしながら遊び回っています(脚がつるので山スキーは減りました)。昨年5月には友人に誘われてベトナムのハノイへ貧乏旅行に行つてきました。バンゾック滝という素敵な滝が中国との国境にあり、対岸は中国の観光客であふれていました。陸のハロン湾ともいふべき奇怪な岩塔がニヨキニヨキしているし、安全で昭和レトロな観光地でした。

木嶋 良雄 (工79) 山登りはして

いませんが、カヤックは近くの沼や小川原湖で水上散歩程度に楽しんでいます。着任当初は津軽海峡横断、飛鳥海峡横断、陸奥湾縦断等の遠距離ツーリングをしていましたが、最近では近距離ばかりです。そのほかに六ヶ所へ来てから楽器演奏を始めました。50の手習いであまりうまくならないですが、フルート、オーボエ、トランペットでエンジンジョイしています。フルートは三沢フルートアンサンブルに所属し、定期演奏会ではステージ出演しています。トランペットは毎朝、早出して、会社の体育館アリーナで朝練をしています。70年代のポップス曲を吹くことが多いです。田舎暮らしが長くなつてしまつて東京は遠くなっています。

本園 孝 (文81) 池田市立池田中学校にて支援学級の担任をしています。

今村 義弘 (工84) 山へは全く行かなくなりましたが、鉄道の撮影で資材を背負つて休日は1日10〜20歩いたりしています。

戸田 聡 (経89) 昨年10月に北九州に転勤しました。福岡の小さな山の会に入り、細々と山に行つています。九州からは中央の山はとて

も遠く、周辺の山を楽しみたいと思います。平成以降の黒崎しか知りませんが、入社当時と比べても事業所

も街も大分寂しくなっています。

藤田 繁雄 (医91) 和歌山県田辺市にクリニクを開業して1年余。少し忙しくなつてきました。余裕がなく、今季はスキーには行けず、ランニングすらしなくなりました。山の神様にあきれ顔をされそうです。

朽尾 豪人 (理92) インドアでボルダリングをやっていますが、山はなかなか行けていません。

追悼

山本 信樹氏 (ヒマラヤP29 峰第1次遠征隊員) 昨年8月18日、脳こうそくのため死去、78歳。1960年工学部機械科卒。日産自動車に入り、車両製造部門に所属。スペインのバルセロナ工場建設などに従事した。山岳部の現役時代は59年3



月の黒部川上ノ廊下積雪期初横断をチーフリーダーとして成功させた。自宅は神奈川県鎌倉市。

多趣味だった信さん

野田 憲一郎

信さんが逝ってしまった。1年生の時に山岳部の門をたたいてから60

年、長い付き合いだった。灘高校の出身で、スキー登山部に入り、国体の高校山岳部門にも出場したことがあると聞いた。阪大山岳部では兼清、私と同時に入部し、最初に「オールラウンドな登山者になれ」と教えられ、六甲山での岩登り訓練などに取り組んだ。日曜ごとのトレーニングに熱心に出席していたが、もともと器用なせいも、岩登りはうまかったと思う。思い出深い合宿は1958年春、鹿島槍天狗尾根から五竜往復で、最終キャンプから山本、米林、野田の3人でアタックした。

卒業後、山本は日産自動車、私はトヨタ自動車と、はしなくも競争相手の会社に就職し、それぞれ他地区に赴任したので深い付き合いはなくなった。この年、P29の第1次隊が篠田先生を隊長に出た。兼清、山本は会社から特別休暇をもらって遠征に参加した。とてもうらやましかった。このあと、彼はスペイン、メキシコなどに長く駐在、日本に戻ってからは追浜工場と、もっぱら製造分野で活躍した。その後は関係会社の役員を経て相模原市の部品会社の社長を務めた。

山だけでなく多趣味で、しかも凝り性だった。ゴルフはシングル、帆船模型作りにも熱心に取り組み、自宅と別に工房を持って制作に励み、

横浜帆船模型協会の会長を務めた。年1回の同協会の展示会は横浜周辺に住むOUMCの仲間と一緒に見に行くなど楽しいイベントだった。山の方も忘れず、定年後は「百名山」完登を目標に頑張っていた。私も誘われたが、「百名山は深田久弥さんの百名山で、私ではない」なんて悪態をついたので誘ってもらえなくなった。そこで単独行をやっていたが、北海道で足首を傷め、その後は米林と2人で登っていた。百名山登頂は、米林との鷲羽、黒部五郎で達成したそうだ。

私との最後の山は2011年4月の北八ヶ岳だった。ピラタスロープウェイで坪庭に上がり、北横岳、三ツ岳、縞枯山などをたどり、彼は麦草峠で下山。私と横尾、出雲路は天狗岳、黒百合ヒュッテまで行った。生涯を通じて頑張り屋だった信さん、78歳で逝ってしまったのはと早すぎた。もうしばらく一緒に低い山を歩いてみたかった。

(1960年経済学部卒)

上ノ廊下、P29でも一緒

兼清 喜雄

信樹とは同期入学で、大学4年間を一緒に山行をし、P29第1次遠征隊にも最も若い隊員として参加し

た、最も親しい間柄でした。

山本君を「信樹」と呼ぶのは先輩に山本さんが3人もおられたので、名前で呼ぶことが自然でした。2人の共通点として、当時の山岳部では先輩を含めて左利きは信樹と私の2人だけで、お願いして左利き用の鉋をそろえて頂いて、重宝したのを覚えていきます。

現役時代の山行で特に記憶に残っているのは1959年春山合宿の上ノ廊下横断で、黒部川に膝上まで浸かって渡渉で往復したのがいい経験でした。

卒業して信樹は日産自動車に入社。その年にP29第1次遠征が翌1961年春に派遣されることが決まり、信樹と私は選ばれて参加することが出来ました。この遠征では装備担当を2人で受け持つ、ポカラ出発ではポーターに運ばせる1個約30kgの荷物約100個をバネ秤で作る作業が大変でした。

キャラバンの最後に、住吉コルから雪溪の急峻な上部をポーターに荷物を担いで下ろさせるのは大変なので、持参した特製の滑車を使って悪戦苦闘しながらロープで滑らせながら下ろすことにしました。

ツラギ氷河のそばにベースキャンプを設営したが、予定していた氷河を遡るルートは途中で岩壁があつ

て、氷河が常時崩れ落ちているので、危険で通れないことが判明して登頂を断念。他のルートを探すためにツラギ氷河右岸の6、700m峰からの尾根上にある氷河を遡った時も信樹と一緒にした。

途中で引き返したが、急峻な氷壁を2人で特製のアイスハーケンで確保しながら、交互にアイスカットティングして登り、尾根上のコルにたどり着きました。下方にベースキャンプが見えて、大声でキャンプと連絡が取れて喜んだのもよい思い出です。

(1960年工学部卒)

編集後記

登山かスポーツクライミングか

——。現役山岳部が大きな岐路に立たされています。トップ記事は、現役諸君と交流を重ねてきた山田氏に現状と課題を報告してもらいました。山を志す若者たちの気持ちも環境も我々の時代とは様変わりというところでしようか。今号は8ページ建てと少し薄いものになりましたが、会員の高齢化で山行が減ったとは思いたくありません。現役諸君が参考にしたくなるような報告をもっともお寄せください。よろしくお願いいたします。

(会報担当・高田邦雄)